

「プロローグ」 豊かな漁業資源を守る

継続的に調査実施

豊饒な富山湾と、神通川や黒部川などの大河川を背景に、富山県では古くから漁業が盛んだ。

県の漁業生産量(平成7～11年・属地)は、海面漁業で20,000～26,000トン、内水面漁業(サケ・マスなどの遡河性魚を対象とする漁業を含む)で400～600トンとなっている。内水面漁業は多くの釣り愛好者の需要にも応えることが求められており、生産量こそ海面漁業に比べて少ないが、重要な産業と位置付けられている。特に、アユの増殖に関する調査・研究のニーズが高い。

富山湾は水深1,000～1,200mの深い湾だ。しかも海岸線から急に深くなる。表層は日本海を北上する対馬暖流に覆われ、中底層は冷たい日本海固有水が占める。さらに陸地から大量の河川水や地下水が流入するといった特徴を持つ。

このため、湾内の漁場環境は年によって大きく変化し、その影響は漁の豊凶に強く反映する。そこで県水産試験場では2隻の漁業調査船を使い、漁況・環境調査を継続的に実施している。これらの調査は、漁業資源を枯渇させることなく持続的に利用するためにも欠かせないものである。

水深200m以下の海水は海洋深層水と呼ばれ、その低温安定性・清浄性・富栄養性のゆえに新たな環境資源として注目されている。水産試験場では、栽培漁業や養殖の技術要素に海洋深層水の有用性を取り込んだ特徴ある技術の開発にも取り組んでいる。

今回の連載では、各魚種の生態・漁業・新技術の話を中心に、水産試験場の活動の一端を紹介したい。広報用にホームページも開設しているので、こちらも利用してほしい。(場長・鈴木満平)



氷見沖で水揚げされるブリ。富山湾は海の幸であふれている